がけない分野の人の口から聞かされることがある．本書もそういう類の本で，過去七年間の開拓的調査の一端を披露したものである．個人の旅行とは異なる正式の科学調査を，政治情勢の微妙な地域で行うむづかしさ，それを乗り越えようとするさまざまな努力は，まえがきやあとがきに僅かにうかがえるだけである．こういう本を作ったこと自体もその努力の一つの表れで，この本を足場にしてさらに調査活動の拡大が計られるのだろう．昔とちがって写真や印刷の精度が格段に向上しているし，植物学的予備知識も豊富になったので，たいそう見栄えのする本となっている．144頁までが撮影日付のついたカラー写真で，高山帯，亜高山帯，草原・耕地，砂漠とまとめられている．以後が解説で，生態や用途を含めてかなり詳細に記述されており，とくに薬用についてはくわしい．和名のない植物には学名の片仮名よみがすべてつけてあり，本書が植物研究者以外の一般読者も対象にしていることを物語っている．トンボ出版の住所は，〒543 大阪市天王寺区空堀町 8-16（Tel. 06-768-2461） （金井弘夫）

□角野康郎・遊磨正秀：**エコロジーガイド・ウェットランドの自然** 198 pp. 1995. 保育社. ￥2,300.

自然環境保全の立場から，最近とくに水環境の重要さや湿原生態系の微妙なバランスが話題にのぼる．本書は動・植物生態学の研究者がその解説をめざしたものであるが，尾瀬や釧路のような特別な湿地だけでなく，水たまり，田圃の畦道やため池，川そのもの，さらに海岸のタイドプールまで，水とつながりの大きい環境についての理解を，一般の人々に深めてもらうことを目標にしている．全巻のおよそ半分の頁を，さまざまな水景観とそこに生活する生物の写真に割き，図鑑としてではなく，観察や理解の資料となるような文章で満たしている．見開き2頁が写真，次の2頁が読み切り解説となっているが，そういう工夫のわりには読みづらい．トピックにかかわらず字数が一定に制限されているためだろうか？知らない間に進んできた，海岸の護岸工事による環境多様性の喪失や，最近もてはやされている河川の「多自然型川つくり」への警鐘は，あらためて考えさせられるものがある．筆者の近所でもその例がみられるが，「自然型」という公園を造成したようなもので，予算が余ったので名目のよい仕事に使ってしまったような印象である．観察会や授業の参考に広くおすすめする． （金井弘夫）

□Kimura Y. and Leonov V. P. (ed.): **C. P. Thunberg's Drawings of Japanese Plants** 594 pp. 丸善. ￥66,950.

1988年ロシア科学アカデミー図書館（サンクト・ペテルブルグ）は，争乱に伴う火災により150万冊の蔵書を失った．その復興のための国際事業が進む中で，日本植物の図二束がみつかり，このことは事業に協力していた丸善に伝えられた．丸善は1990年木村陽二郎氏らを送り，これを調査したところ，この図はツュンベリーとシーボルト旧蔵の，未公表の資料であることが判明した．丸善は創業125周年記念事業の一環としてこれらを刊行することとし，まず1994年 "Siebold's Florilegium of Japanese Plants" を出版した．本書はそれに続くツュンベリー旧蔵の図と，それに係わる論説を含んでいる．

まず16頁にわたって，これらの資料に伴っていたマキシモウィッチのノートが示されており，彼の東亜植物研究にこの図が大いに活用されたことを示している．このノートを活字に組み直したものは，**N. Zabinkova** によって第二部に示されている．これに続いて305枚の植物図が原寸で記録されている．ちなみに本書のサイズは**B4**である．ここまでが第一部をなす．第二部は論説で，木村陽二郎は本資料刊行のいきさつと，ツュンベリーの日本植物研究の業績を回顧する．**W. T. Stearn** は欧州の視点からそれを述べるとともに，日本の表記として **Japonica** と **Iaponica** が用いられているが，ツュンベリーは自分の文章には **Iaponica** と記したことはなく，**J** がラテン語では後発の文字であるため，とくにドイツの植字工は頭文字に **J** を使わず **I** を用いた結果であり，語法的にも誤りであるとしている．**V. I. Grubov**，**M. E. Kirpicznikov** は，マキシモウィッチが本資料をいかに研究に利用したかを述べる．**T. A. Tchernaja** は図のそれぞれについて描かれたいきさつを考察